

『犬からみた人類史』グロッサリー

池田光穂・近藤祉秋・大石高典

このグロッサリー（用語集）は、『犬からみた人類史』（勉誠出版、二〇一九年五月、以下本書）を手取るであろう多様な読者が本書を有効活用するのを助けるために、（1）一般読者および初学者にはなじみの薄いと考えられる専門用語の意味を解説すること、（2）犬と人間の関係をより深く考えるための考え方を提案することを目的としている。共編者の池田が草稿を書き、近藤と大石が加筆・修正をおこなった。一部の用語については、執筆者のうち当該分野の専門家の助言を仰いだ。用語は五〇音順に配列した。

1 愛着【あいちゃく】

心理学用語のアタッチメント (attachment) は、他者（項目38、本書では人間や犬であることが多い）とのあいだの特別な情緒的な結びつき（漢語での「着」に注目せよ）のことを指す。愛情 (affection) ともいわれる。犬と人間の進化史研究にとって、両者がどのように愛着の歴史を形成したのかは重要な課題になる。その「歴史」とは、本書を読んでいただければ、お分かりになると思われる。

2 遊び【あそび】

J・ホイジンガによれば、「遊びとは、あるはつきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。（…中略…）それは緊張と喜びの感情を伴い、またこれは『日常生活』とは『別のもの』という意識に裏づけられている」（『ホモ・ルーデンス』高橋英夫

訳、中公文庫、七三頁）。このホイジンガの定義のうち、犬にとって遊びに「非日常」性があるのかについては確かめようがない。しかし、人間と犬は、他の社会性をもつ哺乳類（とりわけ幼獣時代）同様、単独で遊ぶことができるだけでなく、他個体と一緒に遊ぶことができ、そのレパートリーの幅も大きい。人間と犬が共同でおこなう遊びには、ボール遊びのように気軽なものから、「犬の障害物競争」と呼ばれるアジリティのように競技化されたものまでさまざまなものがあるが、それらの研究はまだ端緒にすぎたばかりである。遊びは、人間と犬の未来を占う重要なものになると思われる。

3 安定同位体比【あんでいどうたいひ】

物質をかたちづくる原子は、陽子と中性子と電子から成り立つ。質量の大きい（＝重たい）陽子と中性子のうち中性子数の異なる放射活性のない（＝容易に陽子や中性子を放出しない）原子（例えば、炭素、窒素、酸素、水素）の比率は、その生物が生活していた地域、時代、生態系のなかでの食物連鎖上の位置などにより微妙に異なる。その比率つまり安定同位体比を比較することで、年代、地域、原産地、食性などを推定することができるため、環境学、生態学、考古学、自然人類学などの分野で盛んに活用されるようになっていく。

4 犬肉食【いぬにくしょく】

人間と犬が共存生活をはじめた時代（遅くとも今から二〜四万年前）から、人間は犬を食べていたことがわかっている。犬が愛玩動物になる前には、人間にとって犬肉食は普通であったという証拠は数多くある。現代人にとって愛着と肉食欲の共存（第19章池田論文）は理解困難であるが、現在でも牛や馬や豚などを肥育したり使役する人たちが愛情をもって飼育し、手放す時には涙を流すことがあることを思えば、犬肉食も一般的に考えられているほどクレイジーなものとは思われまい。ただし、犬肉食を広い範囲に伝播・普及させるためには、獣

肉を人間と犬が競合的に分け合うしかない狩猟採集生活(29「採集狩猟(民)」参照)よりも、余剰農産物を与えて犬の食性を変化させたり、肥育したりするという飼育技術が必要になるだろう。そのために、犬と人間の共存史のなかでは、その最初から犬肉食がはじまったわけではないと推論することもあながち無理とはいえない。

5 犬の社会化(と社会化期)【いぬのしゃかいか】

人間も犬も成長過程の中で、のちの生涯の身のこなし方の心理学的・行動学的な基礎をかたちづくる。これを発達という。犬には、発達の過程で二つの社会化期がある。最初の犬の社会化期は生後三週から一二週つまり生後一ヶ月から三ヶ月の間である。この感受性の強い期間に、犬は人間を含む他の動物個体との社会的な交わり経験を通して、誰が「仲間」であるのかを学習する。この期間に人間と出会わないと、その個体は人一般を怖がるようになり修正が困難になるといわれる。一般の愛犬家やドッグトレーナーというのは二つ目の社会化期のこと、それは三ヶ月齢から六ヶ月齢くらいまでの時期を指し、環境の様々な刺激に慣れる時期と解釈されている。この二つの社会化期は異なる文脈で使われる用語だが、どちらも子犬の学習の感受性が高い時期で、オオカミのこどもの生育環境との対比から次のように解釈、説明されている。つまり、最初の社会化期は巣穴の中にいる時期に相当し、ここに母親以外の個体が入ってくることで「オオカミ」という仲間を知る。二つ目の社会化期は、巣穴から外に出て環境を探検し始める時期で、この時期に外界の様々なものに出会って学習をしていく。

6 犬の性格【いぬのせいかく】

性格は、「振る舞いの一貫した傾向」と説明される。犬の性格は、飼い主への質問紙や行動観察によって評定する。犬の性格には、人間の性格と同様に(1)先天的なものと(2)後天的なものがある。(1)の要因

は、神経伝達物質で情動に関与するドーパミンおよびセロトニンを合成したり、それらの物質の感受したり吸収の促進/阻害などに関連する遺伝子による。一方、(2)はいわゆる学習や経験あるいは訓練による。この二つの要因が相互に影響し合って性格が形作られることが分かっている。したがって、人間や犬の性格を、氏(遺伝子)か育ち(学習)かという単純な二分法で割り切って考えることはできない。

7 犬の群れ【いぬのむれ】

動物には多かれ少なかれ「群れ」をなす習性がある。英語ではヒツジなど草食動物の「群れ」はHerdと表現されるが、オオカミのような集団で狩りをするイヌ科動物の群れはpackと区別される。オオカミは群れで狩猟をしたり、母系制をとるために、若いオスとメスが群れ離れすることで、遺伝子の拡散をはたす。犬の家畜化により、単独化しても人間に交配を手伝わせることで群れ生活を放棄することが可能になる。オオカミの群れは、両親とそのこどもたちからなる家族群である。両親と当年の子のみという群れ構造が一般的だが、前年あるいはそれ以前に生まれたこどもが群れに残る場合があり、この場合は群れサイズが大きくなる。群れの順位が一位のアルファ個体は両親で、繁殖はこのアルファペアのみで行われるが残った年長のこどもたちは妹や弟の世話を手伝う(ヘルパー)。野犬が群れをなすのも、その先祖のオオカミ的生活態度を受け継いでいるからなのだと考えられるが、犬の群れはオオカミのような構造を持たず、アルファペア以外は繁殖しないという現象も観察されず、ヘルパーも子育てへの協力をしないようだ。つまり家畜化の過程で、イヌは再生産可能な群れを構成する社会行動を弱められた、と考えられる。

8 ウェルビーイング【うえるびーいんぐ】

ウェルビーイング(well-being)は、一般的には福祉やソーシャルワークで用いられる言葉で、「個人の権利や

自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること」(『知恵蔵』、二〇〇七年)を指す。この言葉は、疾病の有無のみならず、食生活への気配り、老後のケア・生きがいなど幅広い事象を含むものである。近年、ペット産業の拡大とともに犬のウェルビーイングについても注目されるようになってきた(本書コラム4、5参照)。猟犬(項目52)で述べたような犬と猟師の自然を相手にした厳しい関係とは対照的に、近年高まるペットのウェルビーイングへの配慮は、人間から犬への一方的なもののように見える。しかし、犬は人間に対して自らに配慮を促すように行動上のさまざまな進化を遂げて、愛玩対象としての役割も含めて人間社会の一部となってきた歴史に着目すれば、犬と人間のウェルビーイングをめぐる関係は互恵的であることが明らかである。

9 オオカミ【おおかみ】

イエヌのご先祖はオオカミである。イヌとオオカミの遺伝子はほとんど同じであり、考古学上、ならびに遺伝子の解析からオオカミが家畜化して現在のイヌの先祖になり、限られたいくつかのイヌの系統から今日の多様なイヌが生まれたとみなされている。しかし、イヌとオオカミの形態的かつ行動的な違いは明白である。また、イヌの性格(項目6)でみたように、ヒトが多様であるように、イヌはさまざまな理由で多様である。このイヌの多様性は、野生のオオカミの行動や性格の斉一性とは明らかに対照的である。

10 オキシトシン【おキシトシン】

オキシトシンは脳内でつくられるホルモンで九種類のアミノ酸からなる。もともとはメスの分娩誘発や乳汁分泌に関連するホルモンだと思われていたが、オスにもあることがわかり、相手に信頼感を抱く時に、メスでもオスでも身体の中では分泌される。つまり、犬と人間がじゃれあったり、社会的に寛いだりしている時には、

犬の身体にも人間の身体にもオキシトシンがでている(本書第5章今野論文)。オキシトシンによりヒトの自閉症の症状改善がみられること、つまり社会的になることが明らかになっている。社交性がない気難しい犬の改善のためにオキシトシンが将来使われるかもしれない。

11 学習(と条件反射)【がくしゅう】

学習は情報やそれに伴う行動を自分のものにするものである。学習の定義は古代ギリシャより変わっていないのに、人間や動物がどうして学習するか理論には、近代だけでも一ダース以上の多様な説明方法がある。批判こそ多いが学習に関して里程碑になる理論は連合学習論であり、それらは、オペラント学習と古典的条件づけからなる。オペラント学習は、誘導したい行動には報酬(例…お菓子)が、誘導したくない行動には罰(例…電気ショック)が、それぞれ与えられるというものだ。学習者あるいは学習犬は事後的に与えられた報酬や罰と関連づけて事前の行動の意味を連想(つまり連合学習)する。古典的条件づけは、必然的におこる反応(「肉をみたら涎が出る」とそれとは無関係な刺激(「パツハの音楽を流す」を何度も何度も同時に提示する方法である。古典的条件づけにおいて条件反射が起こるとは、そのような訓練の結果、パツハの音楽を聴くと目の前に肉が提示されなくても涎が出るように身体が関連(つまり連合学習)するようになるのだ。

12 家畜化(ドメステイケーション)【かちくか】

野生動物を飼いならし(馴致「じゅんち」という)、人間と共存できるようにすることが「家畜化」と考えられてきた。家畜化の目的は運搬や農耕の労働力として、あるいはその肉や乳や皮を直接利用することである。しかし、大型哺乳動物に比べると犬や猫は、馴致する意味がわかりにくい。犬の場合は、狩猟に利用したり、犬肉としてタンパク源になることがわかる。猫の場合は家鼠の駆除である。家畜化の過程で、動物の形態が変化

する。イエイヌの形態変化の驚くべき多様性は、犬のほうが猫よりも、姿形にこだわったために育種という遺伝的介入が著しかったためであろう。近年では、人間が動物に介入する方向で「家畜化」を考えるのではなく、動物側から人間に働きかけて、その内部で生活するためのニッチ（項目42）を構築したという見方で「家畜化」を捉える仮説も提出されてきている。

13 擬人法【ぎじんほう】

人間以外の事物・動物に対して、人間の性質・性格を与えたり、「人間語」を発話させたりして、それらに人間の性格を与える方法を擬人法という。この人間の能力は、想像力を駆使して相手の動物に感情を投影することであるが、その能力は人間が言語能力を操れる能力から派生しているものと思われる。イヌの場合は、本書第5章今野論文にもあるように、オオカミから眼「まなこ」の形状を変えたことで、人間が情動をともなう相互作用を行いやすくなった。このことは、人間がイヌの行動を擬人化する傾向があることに関係しているかもしれない、たいへん興味ぶかい。

14 境界【きょうかい】

人間と動物、自然と文化、あるいは人間と非人間の間を分ける境目のことである。これらの区分は、しばしば二項対立的な思考枠組みを前提として意味をなすが、犬は人間ではない動物でありながら人間の社会に日常的に参与するなど簡単に割り切れない位置を占めているところに特徴があり、境界を侵犯しゆるがせにする力を持っている。したがって、生態学的な、そして社会的なニッチを重複させながらも生きる人間と犬は、互いの生きる世界の境界をどのように維持しながら共存できるかという問題を抱えているといえよう。

15 共生関係【きょうせいいかんけい】

共生とは複数の生物種がおたがいに相互関係をもちながら同じ空間を共に生活することである。日本語の共生からはお互いの生物が得をする関係（＝相利共生）を想像しやすい。しかし生物学者は、寄生や片利共生、さらには片害共生など、片側だけが利益を得たり、相手に害だけを与えるものも共生と呼んでいる。だが人間と犬の関係や、人間や犬のそれぞれの親子関係などさまざまな共生関係を考察すると、それぞれの時間の相で、片利や片害さらには寄生なども実際にみられる点で、犬と人間の関係は共生関係のすべての相を併せもつていることがわかる。

16 ケア【けあ】

ケアは長いあいだ人間の特権だと思われてきたが、生態学者や行動学者は昆虫をふくめて様々な動物に「ケアらしきこと」を発見してきた。そうすると人間は、人間のみが「愛情にもとづくケア」をするもまた人間の特権を主張する。しかし、人間と犬の相互作用を詳しく観察すればするほど、犬にもまた「愛情にもとづくケア」が見られることが明らかになる（8「ウェルビーイング」参照）。本書の読者には、人間中心のケア理論には限界があることを知ってもらいたい。

17 系統【けいとう】

オオカミからイヌが家畜化されて、近代になると育種学上の系統が作り出されてきた。犬のブリーダーや専門家たちは、交配の記録やDNA分析などから四種類から六種類ほどの系統にわけているが、それらに経験的にかつ独自のラテン語分類名称を与えているために、科学的には信頼性がおけない。なぜなら、犬は相互に交配種ができるので（23「雑種」参照）、このような系統はあくまでも便宜的なものだからである。

18 犬種 (ブリード) 【けんしゅ】

各国のケンネルクラブの総元締めともいえる国際畜犬連盟 (FCI) では三〇〇犬種 (ブリード) 以上のものが公認されているが、非公認を含めると数百から多く見積もって八〇〇程度の犬種があるらしい。もともと犬は相互に交配できるので、いわゆる「犬種」は生物学上の「種」とは異なる (26「種」参照)。

19 後期旧石器時代【こうききゅうせつきじだい】

旧石器時代は人類による石器使用の始まりから農耕の開始までの時代を示す概念で、前・中・後期の三期に区分されている。後期旧石器時代はその最後のもので、農耕がはじまる新石器時代 (31「新石器革命」参照) の直前の時代をいう。この時代の特徴は、ネアンデルタール人の絶滅や現代人ホモ・サピエンスの登場、埋葬に副葬品を供えるなどの原始的な宗教儀礼、洞窟や壁崖面に絵や意匠などを描く芸術創作活動がみられることで、技術革新としては石刃技法による石器の多様化と量産、精緻な骨角器が登場した。

20 個体間の協働【こたいかんのきょうどう】

同種、もしくは異なる種の個体どうしが協力して行動し、目的を成し遂げること。通常、同種の個体どうしでも難しいとされるが人間と犬はさまざまな課題に対して難なく成功させることができる。

21 コミュニケーション【こみゅにけいしょん】

人間と犬が相互作用を通して (愛情のような情動を含む) 情報を伝達している時に、人間と犬の間にコミュニケーションがとれているという。これは異種間コミュニケーションの一つと見なすことができる。世の中には「犬語」がわかる人間がいるらしいが、科学的に証明されたわけではなく、またそれを調べる普遍的な評価方法

についてもいまだに国際的合意がない。むしろ、コミュニケーションの媒体として視覚、聴覚、嗅覚、触覚といった多様な感覚入力チャンネル (感覚モダリティともいう) が用いられる点が、犬と人間のコミュニケーションには重要である。

22 在来犬【ざらいけん】

古くからその土地に住んでいる犬を総称して在来犬とよぶ。保全生物学では在来種 (indigenous species) という概念があるが、これは外来種 (introduced species) との対比のなかで生まれた。しかし野生種の移動や侵入と異なり、犬の場合は犬種の人為的な持ち込みと交雑が進むと在来犬の形質は変化してゆく。日本では近代化とともにこのプロセスが加速すると、これを防ぐために「本来の」日本在来犬、すなわち「在来犬」を定義し、それらの品種の形質を守っていこうという運動が生まれた。本書13章およびコラム3を執筆している志村真幸さんの『日本犬の誕生』(勉誠出版、二〇一七年) を読むとその事情がよくわかる。

23 雑種【ざしゅ】

一般には雑種犬とは、品種として認証をうけていない交雑犬のことである。ただし学術的事情はもつと複雑だ。犬は生物種としては一種類の「種 (しゅ、species)」 (≡相互に交配可能な単一の種) に属するために、生物学的には極論すると犬には「雑種犬」というものは存在しないか、あるいは「すべての犬は雑種である」ということになる。雑種という呼称と考え方が生まれたのは、それに対立する「純血」を維持した「純系種」が人為的に認定された結果なのだ。犬の立場からいわせていただくと、「人種」の概念と同様に、もともと同じものを、こつちの品種がいい、悪いという差別はもうやめて、あらゆる犬のウェルビーイングのために、好き嫌いとはもかく犬が人間から平等に愛される権利を保障していただくことを望むものである。

24 視線接触【しせんせつしよく】

アイコンタクトのことで、視線と視線を合わせることである。人間と犬とのコミュニケーションでは、視線接触は以下の三点の理由から重要である。(1) 視線接触は、ヒトがとくに重視する視覚コミュニケーションの出発点である。(2) ヒト以外の動物では視線接触を主に威嚇や警戒や敵意など否定的な信号として使用することが多く、親和的信号として使用されるのは稀である。(3) ヒトとイヌの相互作用では視線接触が親和信号として機能する。犬との視線接触では、犬が尻尾を振るか、「ウー」と唸り声をあげるか、完全に無視されてしまうかで、我々の心の動きは大きく変化する。人間と犬のコミュニケーションを考えるうえで、視線接触の進化は重要かつ独自の役割を果たしたことは想像に難くない。

25 社会的知性仮説【しゃかいてきせいいかせつ】

マキャベリの知性仮説ともいう。動物が、根拠がある推論(＝論理的に的確)を行い、それに基づいて行動を変えることが、外部から観察される時に、その動物に知性があると主張するニコラス・ハンフリーの主張(＝仮説)である。コンピュータの世界では、中身がためでも外部観察している人間によって知性があるとなされるときに「チューリング・テスト」が満たされた(＝合格した)と判断する。これと同じ理屈を当てはめると、社会的知性仮説はいわば「野生のチューリング・テスト」ということができる。例えば、犬がいたずらをして飼い主が怒ったときに犬が済まなさそうな表情をしたり、「服従の姿勢」である腹見せジェスチャーをしたときに、野生のチューリング・テストに合格することになる。なぜなら、そのような犬の行動表現が飼い主の情動に訴え、飼い主は犬を叱ることを断念するからである。このコミュニケーションの様式は、犬と人間の間に関係性における社会性を保証する。このように、犬と人間の両者に育まれる認識論的合意からなるものを、私たちは社会と呼んでいる。

26 種【しゅ】

生物の種(species)で、遺伝子の類似性により個体間での生殖が可能なるものを同一種とする。イヌとオオカミは同一種(*Canis lupus*)であり、イエイヌは、種のレベルよりも下位種での違いにより*Canis lupus familiaris*と分類される(学名の記載法については序章注3を参照)。化石を扱う古生物学、遺跡遺物を扱う考古学、遺伝子を調べる分子生物学の知見によりイヌの祖先とオオカミの祖先は同一であることが明らかにされた。しかし、イヌの科学の歴史を紐解くと、生殖可能であっても地理的な隔離や、行動的変異を起こし生殖できない場合には、同一種であっても別種として取り扱われてきたのが、イヌとオオカミが共通にもつ種の物語である。

27 重要な他者【じゅうようなたしゃ】

学術用語としての「重要な他者」は、象徴的相互作用論の社会学者G・H・ミードが提唱した。ミードは、ヒトの子どもの発達にとって自己のイメージとアイデンティティを形成することに他者の存在が重要になるとを指摘した(38「他者」参照)。このことをイヌとヒトの関係に拡張すると、飼い犬のような条件の中で両者はともに、お互いに重要な他者とみなしていると考えることができる。本書でもたびたび登場するD・ハラウエイは、「伴侶種」論の中でヒトにとって犬が、そして犬にとってのヒトがそれぞれ「重要な他者」であると捉えている(45「伴侶種」参照)。

28 呪術【じゅじゆつ】

超自然的なものに訴える人間の祈願行為全般を呪術ないしは魔術(magic)という。文化人類学者は、邪悪な意図をもって霊または人間(ないしは擬人化された動物)がかけるものを邪術(witchcraft)ないしは黒魔術、行為者の意図なしに超自然的な現象がおこることを妖術(witchcraft)と細かく分類することがある。研究者により

様々な分類や使い分けがあるが、呪術は超自然的な力の行使という点でもっとも一般的に使われる包括的な考え方である。

29 狩猟採集(民)【しゅりょうさいしゅう(みん)】

狩猟採集を生業のスタイルとして暮らす人々を狩猟採集民と呼ぶ。狩猟採集の生活様式は、文化的かつ民族的習慣であり、後天的に学ばれ習慣化しているものである。現在では、政策によって農耕化を強制された場合や、伝統的な生業とあわせて自給的な農耕をおこなうようになった場合もある(本書第7章大石論文)。また、昔ながらの猟具ではなく、ライフルやモーターボートのような工業製品を用いて狩猟採集に基づいた生活を継続する民族集団もいる。狩猟採集は、人類史の中でもっとも古い生業形態であることから、原始的で劣った生活様式であると誤解された。このようなレッテルは、今日では大きな誤りであることが指摘されている。さまざまな人類学・民族学的研究から、一〇〇万年以上の歴史をもつ人類の狩猟採集生活も、一万年前からいに誕生した農耕生活や農耕生活民との相互交渉などにより多様な影響を受けて変化していることがわかつている。人間と犬が共存するようになったのは、農耕生活や牧畜生活の開始よりもだいぶ以前である可能性が高いので、狩猟採集民の犬の飼い方を初期農耕民や初期牧畜民が受け継いだ可能性が高い(本書第1章藪田論文)。犬肉食は、先史時代からおこなわれてきたことを示す証拠があるが、余剰農産物がある農耕化によってはじめて一般的なものとなったという見解もある(4「犬肉食」参照)。

30 進化【しんか】

進化とは生物の姿かたち、あるいは行動など(形質という)が世代を経るなかで変化することである。生物がなぜ変化するのは、自然選択(項目37)を通して、世代のなかで優位な個体が生き残り、次の世代に、その姿かたち、あるいは行動などを伝えてゆくからである。それを伝えるのは遺伝子であるが、遺伝子の特性と後天的に学習される行動には、相互作用があるので(6「犬の性格」参照)進化のプロセスを理解するには一般的な特性のみならず個々の具体的な生物群や、当時の地球環境や局所的環境と生物の相互作用(生態学)などを知る必要がある。

31 新石器革命【しんせっきかくめい】

旧石器時代の人々は季節移動する草食動物の群れを追う移動生活をしてきたが、農耕や牧畜の開始とともに定住生活を始めたと考えられている。この新石器革命によって食料調達や居住環境の安定化がもたらされ、人口の増加と、集落構成員の仕事の分業化や専門化が進んだと思われる。これらを契機にやがて食料生産者や道具類を生産する職人、それらを管理する専門職、兵士などを組織化した国家が誕生すると考えられている。

32 人類史【じんるいし】

文字通り人類の歴史のことであるが、異なる時間スケールを扱う三つの科学からアプローチされてきた。つまり(a)一〇〇万年単位のスケールを扱う人類進化学、(b)数万から千年単位を扱う人類考古学ないしは先史考古学、そして(c)狭義の歴史概念にとって重要な文字資料を中心に扱う歴史学の領域がある。ここに「犬からみた人類史」という観点をはさむとどうなるか? それは(a)犬が人類と同等な生物進化の法則にしたがい、食物をめぐる競争する時代、(b)犬と人間が手を差し伸べて共存を模索する時代、そして(c)人類が犬をてなづけてから同一文明内の同僚として扱ったり、異質の他者(38「他者」参照)として文化的に排除したり「犬の文化的ステレオタイプ」が進んだ時代というふうに描けるはずである。例えば、このような観点から本書を読み直すことで、読者は新たな人類史を理解することができる。

33 神話【しんわ】

神話は、世界がいかにして現在の状態に至ったかを説明する物語である。多くの場合、太古の時代に起きた実際のできごとであるとされ、神々・精霊や人間、動植物といった登場人物の活躍が描かれる中で、現在よく見られる事象の起源が明かされる。犬は、人間にとって身近な生きものであり、頻繁に神話の題材として取り上げられてきた。例えば、犬がもともと人間の先祖であったとする神話も記録されており、「犬祖神話」と呼ばれる（本書第6章山田論文）。神話がオオカミ（および野生のイヌ科動物）と犬の違いをどのように説明しているかも「自然」と「文化」の境界を考える上で興味深い論点である（本書コラム1）。アラスカ先住民の間では、呪術師である〈ワタリガラス〉のために犬肉を饗するという神話モチーフもあり（本書第10章近藤論文、犬肉をめぐる文化的イメージを考えるヒントになるかもしれない）。このように、犬の神話にはいろいろな切り口から考える余地があるだろう。

34 生業【せいぎょう】

狩猟採集、農耕、牧畜、漁撈など、人間が生計を立てる業、すなわちなりわいのこと。本書では、とくに狩猟活動における人間と犬の協働に着目した論考を多く取めたが、狩猟以外のさまざまな生業においても犬との関わりがみられる（20「個体間の協働」参照）。

35 生―政治（と生―権力）【せいせいせいじ】

フランスの哲学者M・フーコーが提唱した、近代に登場する新しい権力と統治（＝支配）の考え方。個々の身体に医療などを通して介入して人間や犬の寿命の進展やウェルビーイング（項目8）に介入する解剖的政治（アナトモポリティック）と、出生や育種的介入をして人口や個体数そのものを制御調整する生権力（ビオポ

リティック）の二種類がある。つまり、医師や獣医師、保健所やブリーダーは、診療や予防注射や病気の予防キャンペーンを通して生―権力を行使することで、人間と犬の生命と人口に関わっているのである。

36 セクシュアリティ【せくしゅありてい】

セクシュアリティは、生物学的な次元での性を指すセックス、および文化的な差異を指すジェンダーのどちらも含みこむような、性のあり方全般を意味する言葉として用いられる。M・フーコーの有名な研究以降、この言葉は、狭義の性行為に限定されるものではなく、アイデンティティや欲望、それらを管理するために利用されてきた制度や知識も含みこむものとして理解されるようになってきた。犬と人間の関係でいえば、愛玩犬・野良犬の避妊をすることは公衆衛生的な観点から自治体によって推奨されているが、動物の権利を擁護する立場から考えれば、犬のセクシュアリティの自由を侵害する行為だということも理論的には可能かもしれない。また、性的指向といえば、同性愛と異性愛の区分が論じられることが多いが、近年、人間が他種を性的パートナーとみなす動物性愛も議論されるようになってきた（本書第17章濱野論文）。

37 選択【せんたく】

選択 (selection) とは、C・ダーウインによって提唱された進化論において、世代間で起こる変化を説明するメカニズムである（30「進化」参照）。生物進化において、ある身体形質や行動特性をもった性向が、世代を通してそのなかでの数および集団の中での比率を増やしていく現象をいう。生物個体は、宮崎県幸島で観察されたニホンザルの芋洗い行動が伝播したことのような例外はあるが、基本的にはその世代のなかで学習した性質を次の世代に伝えることはできない。そのため、集団のなかで選択されるような要因（例えば、その環境に耐えられたり、病原菌に耐性のある性質など）にさらされることで、より適応的な個体が生き残ってゆくことによって選

扱されると考えるのである。人間が他生物の特定形質を好ましい方向に変化させようと選択することを人為選択という。

38 他者【たしや】

象徴的相互作用論という社会学の一派では、他者との相互作用をとおして人間は社会的な存在であることを自覚し、その社会的役割（友人、配偶者や親や子供、教師や生徒など）における適切な振る舞い方を学んでゆくという。犬には社会的知性（項目25）がみられ、視線接触（項目24）ができるために、犬どうしのみならず人間との相互作用のなかで人間を他者とみなしていることは明らかである。このことは、飼い主の家族の間の峻別を通して、いわゆる自己観を形成するための「重要な他者（significant others）」（項目27）を認知している可能性を示唆する。

39 タブー（禁忌）【たぶー】

ある社会・集団の中で共有されている、「〜してはならない」もしくは「〜のときは、〜せねばならない」といった約束ごとを指す。多くの場合、破ったものには超自然的な罰が与えられると説明される。タブーの考察では、それがあつたことで社会の成員が生きのびるのに有利であつたからとする機能主義的な説明と、タブーをある社会の世界観や分類体系から解き明かそうとする象徴論的な説明が代表的な理論といえる。犬肉食がタブーとされている社会であれば、犬を食べるよりも使役したほうが食料獲得の上で有利であつたから人々は犬を食べないという取り決めを作つたという解釈をすれば、機能主義的な説明と考えられ、犬はその社会の中で通用するカテゴリーに収まりづらい両義的な動物であるからと論じれば、象徴論的な説明だといえる（51「両義性／両価性」参照）。

40 独我論【どくごろん】

独我論とは自分の心だけが確実に存在するものだとする哲学的立場のこと。独我論によると、自分の心以外から去来するあらゆる（心の）外部の考えは不確定であるとみなす。この考え方を敷衍すると、独我論者にとつて、自分の心だけが頼りになり、他者の心や心の中のものには信頼性がおけないものになる。独我論は、「重要な他者」（項目27）である犬と共存している我々にとつてやっかいな議論だが（極論すれば「犬など存在しない」という暴論になるからだ）、コミュニケーションがとれない犬に「ああコイツはいま独我論状態だな」と思えば、犬が心を開いてくれるまでゆつくりと待つ飼い主の心を涵養することができるとも思えない。

41 トレーニング【とれーにんぐ】

日本の多くの飼い主の心配の種は、家の中での振る舞いが「わがまま」であつたり来客に吠えるという「しつけ」の問題だという。そのため多くのトレーナーがさまざまな犬の教育プログラムを準備している。人間を怖がらないようにするという意味では最初の社会化期が、また身近な環境に慣れるという意味では二番目の社会化期が対応している可能性がある（項目5）。発達上の特定の時期にしか学習できないことと、大人でも学習可能なことがらがある。盲導犬、麻薬探知犬や飼い主のてんかん発作に反応して周囲の人間に知らせる療養犬のような作業犬には、かなり洗練された教育が必要である。アジリティという人間と犬が共に練習を積み重ねて訓練の成果を競い合うこともある。それらはみな犬と人間が共同する存在であることを示している。

42 ニッチ【にっち】

ニッチとは、ある特定の生物種が、生態的環境のなかで占める位置のことで生態的地位ともいう。転じて、社会的あるいは空間的位置づけにおける独自の地位を指しても使われる。例えば、猟師にとつて狩猟犬の

ニッチは、ペット犬のニッチとは置き換え不可能である。犬肉食を必要とする人間にとり、食肉犬と愛玩犬は置き換え不可能である。狩猟犬、食肉として食べられてしまう犬、ペット犬はそれぞれを独特のニッチを占めており、置き換えできない。ただし、第19章にみられるシヨロ犬のように、ある歴史のある社会空間の中では、食肉される犬と愛玩犬のニッチが重複することもある。

43 人間中心主義（と人間Ⅱ男性中心主義）【にんげんちゅうしんしゅぎ】

人間こそが犬を含む他の生物種よりも優秀であり、かけがえのない存在であると信じて止まない発想を人間中心主義という。したがって仲良く犬と暮らしている飼い主は、犬にも独自の世界があることを経験的に知っている点で人間中心主義からはすこし解放されているともいえるかもしれない。現代ペット文化を批判的に捉える視座からは、あくまでも（親のいうことを聞かない）ヒトの子どもに代わる、偏った愛情のはけ口（Ⅱ「うちの子」として犬を飼っている人間の場合、むしろ「人間の世界」の都合を押し付けている点で「犬の世界」に対する配慮が足りないのではないかという意見もあるだろう。いずれにせよ、抽象的に「人間の立場から」なんていってしまうと、その人間の前提や定義には、男性で、成人で、社会的地位の保障された人間が、その人間のモデルになっていることがしばしば指摘される。英語の人間（man）は、マン（man.つまり男性の人間）であってウーマン（woman,女性）ではない。そのような無意識に男性をモデルにする発想法を人間Ⅱ男性中心主義という。

44 パースペクティブズム【ぱーすぺくていびづむ】

観点主義や遠近法といういい方もある。自分の存在を反省的に眺めるときに、独我論（項目40）のままではいつも自分中心の我田引水の議論をしてしまう。それを中和するためには、自分以外の存在の視点とりわけ

他者や他の種類の動物（もちろん本書では犬！）に一旦移してから発想する方法をパースペクティブズムという。人間中心主義（項目43）を克服するにはよい方法であるが、どのようにしたら犬の視点や犬の気持ちになることができるのか、なかなか課題も多い。哲学や人類学の領域では、F・ニーチェやE・ヴィヴェイロス・デ・カストロの議論がよく知られている。

45 伴侶種（コンパニオン・スピーシーズ）【はんりょしゅ】

科学史家・思想家のD・ハラウェイが提唱した言葉である。人間と犬が長年にわたって共存の道を歩んできた二つの稀有な生物種であり、人間のことを理解するためにも、また犬のことを理解するためにも、二種一つの存在であるという認識からはじめなければならぬという一種の理論である。本書でもさまざまな章でこれを引用した議論がされている。

46 ヒューマニズム【ひゅーまにずむ】

人間主義ともいう。「人の命は地球よりも大きい」という主張は人間中心主義（項目43）にも似るが、今日ではかなり異なる使い方がなされている。それは、ヒューマニズムの対象が人間以外の動物にも拡大されて、人間を含む他の動物への慈愛の行為全般を射程に含むように拡大解釈がなされていることだ。例えば間違っただけに陥った子犬や、凍結した池の氷の割れ目にはまった鹿などを救助するレスキュー行為などがヒューマニスティックなこととして賞賛されることがある。これはレスキュー隊員が（人間のみならず他の動物種も救う）人間的行為をしていると賛美されているのかもしれない。こうした行為は、「人道主義」（humanitarian）的とも呼ばれるが、その映像を見るとときに、我々は苦境に陥った動物に対して明らかに擬人化（項目13）して感情移入しているかもしれないので、やはり「人間主義」という使い方が間違っているというわけではないだろう。

47 ペットロス【べっとろす】

ペットを失った後に生じる飼い主の心理的外傷(トラウマ)症状のこと。現場の獣医師によると動物種に関係なく、愛情を込めていた場合や、晩年まで必死に看病する飼い主にはしばみられるという。そのため近年の獣医師やスタッフの研修では、患畜・患獣・患鳥のケアのみならず飼い主とのコミュニケーションやペットロス・ケアについて配慮するようなプログラムが組まれるようになってきている(16「ケア」参照)。

48 ベビースキーマ【べびーすきーま】

人間のみならず動物の子供とりわけ赤ちゃんや幼獣をみた時に、とても可愛くみえる。可愛く見えるには共通した特徴があり、大きな頭のプロポーション、ずんぐりむっくりの丸顔、大きな額、大きな目に対して小さい鼻や口などである。動物行動学者のC・ローレンツはこの図式をベビースキーマと呼んだ。ローレンツの弟子のI・アイベスフェルトは、いつも至近距離にいるにも関わらず成獣が幼獣に危害を加えないのは、成獣にとってベビースキーマは攻撃性を抑制する働きをもっているのではないかと考え、さまざまな動物行動の事例分析や実験観察をしてそれを確かめた。我々の周りには「ゆるキャラ」も実はこのベビースキーマ原則を利用したものであると考えられる。

49 ポストヒューマン論争【ぼすとひゅーまんろんそう】

ポストヒューマン論争とは、人間の後(≡ポスト)に、どのような時代が到来するのか、またその時には「人間らしさの概念」はどのように変化するだろうかというSF(サイエンス・フィクション)、未来学、現代芸術、生命倫理学を含めた哲学などの分野における議論のこと。ナノテクノロジーの発達で人間のサイボーグ化が進み、人間を超える人間の定義が必要というトランスヒューマニズムの議論はまだ人間中心主義(項目43)の議

論を超えていないために、ポストヒューマンの議論はより広いパースペクティブをもつといわれている。犬と人間はともに伴侶種(項目45)であるという議論、つまり犬≡人間の連続体として捉える見方は、もはや人間中心主義を脱却している点で、ポストヒューマン的だとも言える。二〇一七年には国際的な学術誌(*Journal of Posthuman Studies*)も創刊された。

50 村の犬【むらのいぬ】

明治期の日本では、村にいる犬つまり「村の犬」は誰かに飼育されているわけではないが、農作業や牧畜などの用役に従事したり、家の近くで泥棒や野生動物の被害から飼い主を守っていたらしい。この指摘は日本の民俗学者の柳田國男による。それに対してブータンの「街の犬」(本書第18章小林・湯本論文参照)には、飼い主から放棄されたり群れで暮らすようになった野良犬が登場する。村の犬と街の犬という対比のなかで、犬がどのような生活をしているのかを分析することで、人間の生活を浮かび上がらせることができるのである。

51 両義性／両価性【りょうぎせい／りょうかせい】

アンビバレンス(ambivalence)ともいう。例えば、神聖でありかつ薄気味悪いものがあつたとしたら、そのものには異なる二つの価値が共存している。神聖なるものには、荘厳で清浄な面と、我々を罰したりするような敵しくて恐ろしい面がある。薄気味悪いものには、そこから逃れたい気持ちと、怖いもの見たさで引き込まれるような感情を呼び起こす。このように相矛盾する二つの意味や価値が共存するという状況が両義性または両価性と呼ばれてきた。犬もまた、人間に協力し人間を守ってくれる頼もしい存在であると同時に、食欲でわがままで噛み付く存在である。犬を不浄な動物とみなす社会もある。人間における愛と憎しみも、両義性を表現するものとしてよくいわれる。

52 獵犬【りょうけん】

狩獵に使役される犬を獵犬という。だが「使役」は正確ではなく、犬を制御し、狩獵効率をあげるために獵師はさまざまな努力をする。育種、子犬どうしの交換、訓練やしつけ、ケアなどである。詳しくは序章後半の（人間が犬に投下する）「コスト」の項を参照してほしい。獵師は優秀だった飼い犬が死ぬと肉親同様に悲しみ、喪に服したり験を担ぐ。また碑を建てたり、語り継いだりする。他方、獵犬として資質を失ったり、飼い主を裏切ると殺害を含む厳しい処置もおこなう。狩獵における獵師と獵犬の関係は、親子というよりも生死をかける活動を共に担う僚友（獵友）なのだ。